

文学の葉

第32号

Kitakyushu Literature Museum News

2022年10月1日発行

「かいけつゾロリ」と「ズッコケ三人組」

館長 今川 英子

この夏、開催した「三五周年記念 かいけつゾロリ大冒険展」の入館者は、これまで最も多かった「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」の八、〇八一人を大幅に超えて、二二、〇三二人。

原ゆたかさんの「かいけつゾロリ」シリーズは、一九八七年刊行の第一巻『かいけつゾロリのドラゴンたいじ』から今年で三十五年。毎年二巻ずつ刊行され、七一巻目は全国に先がけて当館のミュージアムショップに並んだ。小学生のころに読んでいた子どもが、今や三、四十代の親世代となり、その子どもがまた「ゾロリ」を手に取り、親子で訪れ、父母と一緒に、たどたどしい文字で、「おもしろかった!」「またきたい!」とアンケートに書いてくれている。

原さんのサイン会は特別だ。サインを求める子どもを前にどんなことに興味を持つての?何を読んでの?などと尋ねながら、本の扉に丁寧にゾロリの絵を描き、子どもの名前とサインを記すと記念写真を一緒に、それも二ポーズとつてくださる。一人に三分以上かかるけれど、子どもも親も大喜びだ。

三五年間も続く「ゾロリ」は、旅をしながら毎回失敗しては失恋するが、周りの人はゾロリと出会って幸せになっていく。何だかどこかで聞いたようなストーリー、そう、「寅さん」が好きな原さんは、「失敗しても前を向いて次に進むこと」を伝えたくて描いてきたと話される。同じく子どもたちを虜にしたシリーズに「ズッコケ三人組」がある。作者の那須正幹さんは、昨年七月、急逝された。享年七九。東京での「那須正幹さんを偲ぶ会」には、原さんや来夏の企画展予定の長野ヒデ子さんもみえていた。

第一作『それいけズッコケ三人組』の発表は一九七八年、二〇〇四年『ズッコケ三人組の卒業式』で五〇巻完成。翌年から『ズッコケ中年三人組』シリーズがはじまり、二〇一五年『ズッコケ熟年三人組』で終刊となった。

当館の最初の夏の企画展(二〇〇七年)は、五〇巻記念「ズッコケ三人組ワールド」だった。防府市の先生のご自宅にお伺いして、著作物や自筆原稿などをお借りしたことが懐かしい。

これがご縁となり、「子どもノンフィクション文学賞」の文学賞の立ち上げ時から一昨年度の第二回まで、実質的な選考委員長をお願いした。三歳の時、広島で被爆、昆虫採集が大好きで大学では森林昆虫学を専攻、山岳部だった那須さんは、どのような分野での応募作品についても丁寧に選考された。受賞作品から絵本が生まれ、ドキュメンタリー番組が作られるまでに賞が成長したのは、平和な未来を担う子どもたちを育むという厳しくもやさしい眼差しのためものだ。

「ズッコケ」や「ゾロリ」シリーズに通底する魅力は、児童文学作品に期待される「人生の教科書的作用」や「成長物語」からは遠いけれど、庶民的な逞しさが横溢していることだ。コロナ禍でのマスクや自粛生活は三年になり、ロシアのウクライナ侵攻も収まりは見えず、憂鬱な気分を抱えたまま時間が過ぎてゆく。これを日常とする子どもたちの将来が不安だけれど、彼らなりに知恵と勇気でゾロリや三人組のように力強く生き抜いていくのかとも思う。

現在、美術館分館とともに「祈り・藤原新也」展を開催しています。旧門司市出身の藤原新也さんの大規模な展覧会です。是非ご覧ください。

目次

- 巻頭コラム「かいけつゾロリ」と「ズッコケ三人組」……………1
- 第31回特別企画展……………2~3
 - 「35周年記念 かいけつゾロリ大冒険展」
 - 原ゆたかさんサイン会／原ゆたかさんトークライブ
 - 「かいけつゾロリ 大冒険展」を終えて(担当者コラム)
- 「祈り・藤原新也」展……………4~5
 - 開会記念講演会
- 宗左近記念碑「鐵偶」除幕式／宗左近忌……………6
- 劉寒吉 碑前の集い
- 〈共催〉「蝶の飛来—古の書物から 世界の文学から」第44回光草書道展
- 北九州森鷗外記念会「森鷗外を偲ぶ会」
- 「読み継がれる鷗外」シンポジウム
- 黒田征太郎さんトークイベント……………7
- 話題の「子どもノンフィクション文学賞」
- 平和のまちミュージアムとの連携 平和のまちスタディツアー
- 友の会のみなさんが大活躍!
- やさしい文章教室／ボランティア活動
- 展覧会予告……………8
 - 〔特別展〕鷗外の小倉時代
- お祝い、お悔やみ
- 寄贈者・提供者、提供雑誌

原ゆたかさんサイン会

二〇二二年七月一六日

開会初日の七月一六日には原ゆたかさんのサイン会が開催されました。各回三〇名の三部制で実施、定員の二倍近い申込があり、大盛況のサイン会となりました。

原さんはサインを描きながら好きなキャラクターや、いま興味を持っていることなどを尋ねられ、皆さんと色々なお話をされていらつしやいました。

最後は原さんと一緒に、ゾロリポーズで記念写真を撮影。参加された皆さんの貴重な夏の思い出になったのではないでしようか。



サイン会の様子

原ゆたかさんトークライブ

二〇二二年七月一七日

開会翌日の一七日には、原ゆたかさんのトークライブを行いました。「かいけつゾロリ」ができるまでや、各巻に込められた先生の想い、表紙に隠されたいろいろな秘密をお話いただきました。

原さんは、みずしま志穂さんの「ほうれんそうマン」シリーズの絵を担当されており、ゾロリは本作に登場する悪役でした。「かいけつゾロリ」シリーズは、「ほうれんそうマン」がお休みする間のスピンオフ作品として、書き始められました。

「かいけつゾロリ」シリーズの表紙には、例えば『かいけつゾロリのチョコレートじょう』にはキョロちゃんが描かれていたり、4冊の表紙を組み合わせた原さんの絵が出てきたりなど、色々な隠し絵があるそうです。

トークの中で原さんは、いつまで描けるかわからないけれど、いつまでも子どもの味方で、子どもの気持ちがかかる作家でいたいと話されました。

質問の時間には会場から、原さんが一番好きな巻やキャラクター、おやじギャグ、好きな絵本についての質問があり、笑いの絶えないトークライブとなりました。



原ゆたかさん

参加者の声 (アンケート)

・原ゆたか先生に会えてとても感激しました。サインもとてもうれしかったです。
(11歳)

・ずっときになっていたことをしつもんしたり、サイン会で自分の名前をかいてもらってこつふんした。
(9歳)

「かいけつゾロリ 大冒険展」を終えて

「かいけつゾロリ」の第1巻『かいけつゾロリのドラゴンたいじ』が発売されたとき、私は6歳、幼稚園の年長でした。当時はファミコンで「ドラゴンクエスト」シリーズが流行しており、「ドラゴン」という単語に反応して手に取り、買ってもらったと記憶しています。本作でゾロリは、イシシ・ノシシが操縦するドラゴンにお姫様をさらわせたようにと企みます。結局は失敗してしまいうのですが、読みながらこの悪だくみ

と一緒に加わっているように感じたことを今も覚えています。また作中に登場する「いなずまのつるぎ」と「ぐにゃぐにゃのけん」を段ボールで作ったのも、楽しい記憶です。

決して本が好きというわけではなかったのですが、このとき本を読む快楽を知りました。こうして、かいけつゾロリ第一世代の、本好きの子どもがひとり出来上がったのでした。

それから小学三年生のときに刊行された6巻『かいけつゾロリのチョコレートじょう』まで読んで、私は「かいけつゾロリ」を「卒業」しましたが、大学生の時に映画「チャリリーとチョコレート工場」を見た時、本作のことを思い出しました。映画の原作である児童小説『チョコレート工場の秘密』が本作の下敷きになっているのではと考え、「かいけつゾロリ」という引出しが自分の中にあることを感じました。また作中に登場する、「ブルルチョコ」を食べてみたいと思っていました。今回の展覧会でカフェ・ラポールさんがコラボメニューの一つとして作られ、思いがけず夢が叶いました。

35年前、読書の楽しさを教えてくれた「かいけつゾロリ」、その展覧会を担当できたことはこの上ない幸福でした。

(学芸員 稲田大貴)





藤原新也さん

では個人的世界」となったと語りま

(60代・門司区)

風景もありました。

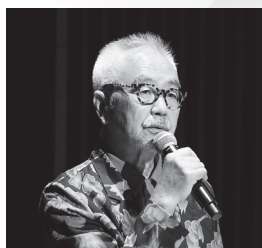
4

「祈り・藤原新也」展 開会記念講演会

二〇二三年九月一〇日 北九州芸術劇場小劇場
「祈り・藤原新也」展の開会を記念して、講演会が開催されました。

藤原新也さんは「展覧会の話を持ち込まれた当初は『まだ自分は回顧展はしたくない』と、一度は遠慮した」と話し始められました。しかし「魔が差して」受けることとされたと続けられ、聴衆の笑いを誘います。美術館分館と文学館は面積も、天井の高さもまったく異なります。そんな二会場での展示構成案には大変苦労されたものの、他人任せにはできないと、何度も考え直し、最終的に、美術館分館では写真家として撮影された〈公的な作品〉を、文学館では写真・絵画・書など〈私的な世界〉として棲み分けることになったと話されました。今回展示されている写真作品は、過去の膨大なフィルムから、藤原さん自身が現代の目線で選び直し、プリントし直した「新解釈の作品」です。

展覧会タイトルの「祈り」というフレーズは、早朝の朝靄に煙るガンジスで船を漕ぐおじいさんを撮ろうとしたとき、ふと「祈り」という言葉が浮かんだことに由来するそうです。今



回、五十年間の仕事を回顧して、なぜ「祈り」という言葉が浮かんできたかは分からないけれど、「写真を撮ることは何かと接触すること、触れあう・見る・見られる・関係を切り結ぶこと」と感じたと続けられます。藤原さんは、常に写真を撮る際、「対象と向かい合いたい、接触したい」との思いを抱きながら旅をしてきたそうです。「自分は狙って何度もシャッターを押して写真を撮るのではなく、ふとした瞬間を撮る」とおっしゃる藤原さんですが、風景でも人間でも、「接触したい」、「関係をもちたい」と思いながら対象と向かい合うと、接触する率があがり、そして接触ぐせがつくと、不思議なことに、滅多に出会わない風景や瞬間に出会え、さらにエネルギーまで貰えるそうです。しかしコロナ禍の今日は非接触時代となってしまうといいます。目や意識で、「はっ」となることが減ることを危惧すると語られました。

展覧会に選んだ作品から何点かエピソードを披露されました。

ポスターのメインビジュアルにも使われた、恐山の写真（写真1）は、三年前に撮られました。早朝、開山してすぐの時間帯に濃霧の中を登っていくと、ちょうど朝日が昇ってきたそうです。藤



写真1 恐山 2016年 ©Shinya Fujiwara



写真2 石巻 2011年 ©Shinya Fujiwara

原さんが思わずシャッターを切ったのは霧が晴れ渡りきった十秒ほど前で、「一瞬の出会いを収めた」という点でも非常に象徴的な写真です。恐山の住職も「こんな光景は見たことがない」と語る瞬間で、写真家だけが出会えた景色だと話されました。

震災直後の石巻を訪れた際は、ただ無音で膨大な瓦礫だけがずっと広がる海辺の街を前に、写真を撮る気にはなれなかったそうです。満月の明かりに照らされた街の景色（写真2）について、「新月のほうが良かった。満月は残酷だ。なぜなら、月明かりが全てを明々白白にしているから」と話されます。しかし、「今は、月の光が街を慰撫しているようにも感じられます」と述べました。また、浪江町を収めた写真については、「このときは怖かった」と語ります。人間が住む街なのに、小雨がさらさら降る音が聞こえるほど、人氣がまったくないためです。ただ静寂に包まれた町並みを前に、かつて原

爆投下直後の長崎爆心地に最初に入ったカメラマンが「音が聞こえなかった」と述べたエピソードを思い出され、風景の持つ物語を連想されたそうです。

インドで撮られた作品、記者会見の人物写真など、写真ごとに異なるお話が披露されました。会場は時折聴衆の笑いに包まれました。最後に、藤原さんは「写真を撮ることはその世界に入り、ひとつひとつの物語を感じる。展覧会を通じて、写真の持つ物語を感じて欲しい」と話され、講演を閉じられました。

アンケート

・このたびの「接触」に私も大きなエネルギーをいただきました。講演はお嫌いかもしれませんが（笑）、ありがとうございました。

（40代・八幡東区）

・写真を撮る意味、接触などの考え方で理解を深めました。写真もただ眺めるだけではなく、読み取り方や理解の仕方のわかる講演でした。TOOTOの話は小倉ならではでしたね。（50代・さいたま市）

・写真には物語があるということを知ることができました。インドでの人間の死に関わる写真は衝撃でした。（60代・門司区）

・写真の背景に物語が写るような写真を撮りたいたいと思います。（60代・福岡市）

宗左近記念碑「鐵偶」 除幕式／宗左近忌

二〇二二年六月一九日

戸畑区牧山生まれの詩人・宗左近は、美術評論家、翻訳等の分野でも活躍し、生涯百冊に及ぶ著書を刊行しています。

このたび、宗左近を記念する鉄の彫刻「鐵偶」が宗左近ファンクラブから北九州市に寄贈されました。「鐵偶」は戸畑図書館の敷地内に設置され、宗左近ファンクラブ主催の除幕式が執り行われました。天気にも恵まれ、式には約50名が参加し、戸畑大山笠のお囃子が披露されました。



「鐵偶」は母里聖徳さん（彫刻家）が、宗左近の遺志が後世に継承されるよう「鉄・反戦・世界平和・縄文」をコン

セプトとして制作したものです。

作品はふたつの要素を組み合わせて構成され、上部は「八百万神像」として正面に二つの顔、裏側には反戦平和の願いを込めてW・A・Rの圧縮文字、側面には縄文をイメージした三本の圧縮ラインを表現。下部は爆弾彫刻を圧縮し潰した鉄塊の「邪気像」とし、二つの彫刻を合体させた姿を「鐵偶」として表現しているとのこと。

除幕式の後、西日本工業倶楽部で行われた宗左近忌では、自見榮祐代表と北橋健治市長の挨拶がありました。また、地元出身のシンガーソングライター・富永裕輔さんによって作曲された宗左近の「響灘」等の歌も披露されました。

劉寒吉 碑前の集い

二〇二二年四月二〇日

同人文芸誌「九州文学」を長きにわたって支え続けた作家、劉寒吉を偲ぶ集いが、劉の出身校である福岡県立小倉商業高等学校の主催で文学館・中央図書館前庭の劉寒吉文学碑前で開催されました。

劉寒吉は、『山河の賦』など多くの優れた作品を書き、また鍛冶町の鷗外旧居の保存、歴史博物館、美術館の設立など北九州の文化の礎を築きました。式典では関係者の挨拶ののち、劉が作詞した小倉商業高校校歌が流れ、春の陽ざしの下で劉の足跡に思いを馳せる集まりとなりました。

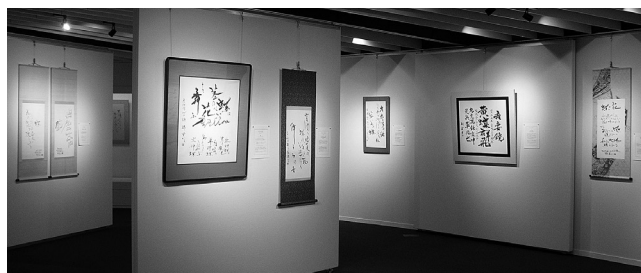
共催「蝶の飛来―古の書物から 世界の文学から」 (第44回光草書道展)

二〇二三年四月二九日～五月八日

光草書道会（橋村雅榮会長）主催の書道展では文学と「蝶」をテーマに、「蝶」が登場する文学作品の一節が書で表現されました。庄子「胡蝶の夢」、清少納言「枕草子」、ダンテ「神曲」、ハイネ「蝶」など古今東西の書物から題材がとられ、あわせて付された文学作品や文学者についての解説パネルは書の理解を一層深めました。

また会期中には、今回の展覧会のテーマを提案された大國眞希さん（福岡女学院大学教授）を講師に、講演会「〈蝶〉と文学」も開催されました。

来場者からは、「書だけでなく、文章の美しさも味わうことができた」「文学作品、書、表装が一体となった表現を楽しむことができた」などの声がありました。



北九州森鷗外記念会 「森鷗外を偲ぶ会」

二〇二三年六月一九日

森鷗外は一八九九（明治三二）年六月一九日に第十二師団軍医部長として小倉に着任しました。これを記念して北九州森鷗外記念会では六月一九日に「森鷗外を偲ぶ会」を開催しています。三年ぶりの開催となった今年は梅雨の晴れ間の好天に恵まれました。紫川河畔の森鷗外文学碑前で碑前の集いが行われ、福岡県立小倉商業高等学校の生徒が「小倉日記」の一節を朗読し、献花をして偲びました。その後、場所を移して、新名規明氏（元長崎近世文学研究会会長）が「森鷗外の歴史小説」と題して講演を行いました。

「読み継がれる鷗外」 シンポジウム

森鷗外（一八六二―一九二二）の没後一〇〇年を記念して、七月三日、東京都文京区・東京大学伊藤謝恩ホールでシンポジウム「読み継がれる鷗外」が開催されました（主催・文京区）。第一部は、「森鷗外ゆかりの地から」と題して、ゆかりの三都市の首長が挨拶を行い、「転機之地・北九州市」からは北橋健治市長が当市の取り組みなどを紹介しました。第二部は、平野啓一郎氏が「鷗外を今読むこと」と題した基調講演を行いました。第三部は、「読み継がれる鷗外」と題して、平野啓一郎氏、青山七恵氏、平出隆氏、ロバートキャンベル氏がパネルディスカッションを行いました。

黒田征太郎さん

トークイベント

二〇二二年八月一日

絵本『旅のネコと神社のクスノキ』(二〇二二・八、スイッチ・パブリッシング)の刊行を記念し、門司区在住のイラストレーター・黒田征太郎さんのトークイベントが開催されました。絵本制作の背景や込めた想いなどを自身の戦争体験とともに話されました。絵本は、現存する被爆建物「旧広島陸軍被服支廠」が舞台で、主人公のネコとクスノキの対話が、戦争と平和、いのちなどについて静かに問いかけます。黒田さんはそのレンガ造りの被爆建物に何度も「会いに」行き、次第に建物が「生きている」ことを強く感じたとそうです。やがて「みんなに話したい、伝えたい」という気持ちが生まれ、作家の池澤夏樹さんに文章をお願いし、絵本が完成しました。



黒田征太郎さん

最後に、親交があった野坂昭如さんの「戦後なんてない。ずっと戦中だ」という言葉も紹介し、「戦争は今も終わっていない。絵本のネコとクスノキの会話の行間に想いを込めた。ぜひ読んでください」と来場者に呼びかけました。

この文学賞は、ノンフィクションを書く経験を通して、子どもたちが人間や社会に感心を持ち、思考力を高めながら成長していくきっかけとなることを願い、二〇〇九年度に創設されました。今年度で第14回を迎えますが、様々なところから関心が集まっていることをお伝えします。

第11回小学生の部で大賞を受賞した前田海音さんは、受賞作品『二平方メートルの世界で』を小学館から絵本として発刊され、第3回「親子で読んでほしい絵本大賞」で1位を獲得しています。

さらに、九月一六日には、NHK(九州・沖縄)「ザ・ライブ」という番組で小学六年生になった前田さんの様子や絵本に励まされ病気への思いを読書感想文に書くことができた千青(小5)さんについて放送されました。

第9回中学生の部で大賞を受賞した梅田明日佳さんは、ドキュメンタリー番組「NHKスペシャル」で特集され、二〇一九年に全国放送されました。また小学館から「ぼくの自学ノート」を発刊されています。最近では、読売新聞のコラムも担当されています。

このように、受賞者の方々が活躍する中、今秋からKBCのラジオ番組でこれまでの受賞作品が5作品程度朗読される予定です。皆様、ぜひ楽しみにしてください。

話題の

「子どもノンフィクション文学賞」

平和のまちミュージアムとの連携 平和のまちスタディツアー

令和四年四月一九日、文学館のある勝山公園内に、「北九州市平和のまちミュージアム」が開館しました。八幡大空襲の追体験ができる360度シアターや、戦時中の市民の暮らしを体験できるコーナーなど、戦前から戦後の人々の暮らしを体験できる施設となっています。

開館に当たり同施設では、学校での平和学習の一環を担うものとして、小学6年生を対象とした「平和のまちミュージアムスタディツアー」を計画。文学館としても、開館前から連携に向けた協議を重ね、平和学習に加え、近隣の歴史・文化施設等も訪問するモデルコース(訪問施設は学校が選択)を作ることができました。

バスツアーは六月から開始されていますが、これまでに、小学校8校、中学校1校の計9校(592人)の皆さんが文学館を訪れてくれました。来館した子どもたちからは、「はじめて来たが、こんなにきれいな場所が市内にあるなんて知らなかった」、「北九州ゆかりの作家がたくさんいるのに驚いた。もっと調べてみたい」など、うれしい声が聞かれ、子どもたちが文学にふれるきっかけになり、文学館の認知度向上及び好感度アップにつながりました。

友の会のみなさんが大活躍!

今年も友の会の活動が活発に行われています。

「やわしい文章教室」(自主企画)

夏休み子どもたちに向けた企画で、2回実施しました。本や言葉に親しんでもらうために、実践的に読書感想文や詩の書き方について学べるものです。小学3年〜5年生7名の応募がありました。

講師を務めたのは、友の会副会長で、北九州市内の小・中学校で教鞭をとった経験をお持ちの江口恵子さん。パワーポイントや資料を使いながら、本選びの視点や文章の構成などを丁寧に解説。その後、子どもたちが実際に原稿用紙に構想を練り、江口さんやボランティアで参加していた会員(4名)と意見交換をし、和気あいあいとした雰囲気の中となりました。

参加した子どもからは、「自分のために感想文を書くということが分かった」、「また保護者からは、「目からウロコでした。親でも指導が難しく悩んでいたので、申し込んでよかったです」などの声が聞かれました。

「ボランティア活動」

この夏、文学館では特別企画展「かいつぞろり大冒険展」が開催され、連日、多くの親子連れなどでにぎわいました。この企画展に合わせ、ゾロリグッズの販売や、混雑時の売店のサポート、展示物の監視業務の補助などを会員の方に担っていただきました。

入館者が多い土曜日・日曜日を中心に、10名の方にボランティアでお手伝いいただきました。

これからも友の会の力もお借りしながら、文学館の魅力向上を図っていきたいと思います。

森鷗外生誕160年・没後100年記念

〔特別展〕

鷗外の小倉時代

2022年11月23日(水・祝)

～12月25日(日)

森鷗外が小倉時代に執筆した原稿「和氣清麻呂と足立山と」「再び和氣ノ清麻呂と足立山との事に就きて」について紹介する展覧会です。森鷗外記念館(津和野町)の所蔵資料で、津和野以外での初の展示となります。

〔森鷗外生誕160年・没後100年記念〕
特別講演会

「鷗外の魅力を語る―自筆原稿、出版広告文を手掛かりとして―」

《講師》山崎一穎さん(森鷗外記念館(津和野町)館長)

《日時》12月11日(日)13:30～15:00
(申込み)11月8日(火)から電話申込み

〔北九州森鷗外記念会との連携事業〕
講演会

「森鷗外の『高瀬舟』―「作品誕生の歴史背景を深める」―」

《講師》寺岡賢治(森鷗外記念会理事)

《日時》11月26日(土)14:00～15:30
(申込み)11月8日(火)から電話申込み

「森鷗外への回帰 中原綾子「戦後スバル」」

《講師》近藤晋平(森鷗外記念会理事)

《日時》12月4日(日)10:00～11:30
(申込み)11月18日(金)から電話申込み

共催企画予告

森鷗外を書く

―第17回北九州市書道連盟代表作家展―

会期：2022年11月15日(火)

～11月20日(日)

会場：北九州市立文学館 企画展示室

共催企画予告

北九州、文化運動の軌跡

1945～60年代八幡製鉄所の周辺

主催：北九州文化運動研究会

会期：2023年3月1日(水)～3月31日(金)

会場：北九州市立文学館 企画展示室



お祝い

・筒井康隆さん(作家)が、恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。

・阿木津英さん(歌人)が、「アララギの釋道空」で第20回日本歌人クラブ評論賞を受賞。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・森崎和江さん(詩人・作家)

二〇二二年六月一五日に逝去、95歳。

・赤塚正幸さん(元北九州市立大学教授、北九州市立文学館開設準備委員)

二〇二二年七月一七日に逝去、74歳。

・西川幸夫さん(画家)

二〇二二年八月八日にご逝去、82歳。

心よりお悔やみを申し上げます。

■寄贈者・提供者

朝日新聞出版、東泰、有川公一、有森信二、安徳由美子、井上ひさし研究会、茨木市立川端康成文学館、今福公明、いわき市教育文化事業団、内田紀久子、大土由美、岡田功、風花随筆文学賞実行委員会事務局、学校法人灘育英会、神奈川近代文学館、北九州市立松本清張記念館、九州大学日本語学会、楠田正博、くまもと文学・歴史館、群馬県立土屋文明記念文学館、さいたま文学館、坂口博、佐々木博子、柴田康弘、周南市美術博物館、新潮社、新宿区立漱石山房記念館、末松詠子、杉山満丸、

■提供雑誌

鷹取美保子、高山市文化協会、竹之内靖方、田辺むつみ、沖積舎、鶴岡市立藤沢周平記念館、田原、徳島県立文学書道館、中原中也記念館、日本現代詩歌文学館、中島国彦、沼津市芹沢光治良記念館、福岡県歌人会、福岡県高等学校国語部会北九州地区部会、福岡市総合図書館文学・映像課古文書係、藤井百合蔵、文京区立森鷗外記念館、文学の森、文藝春秋社、森英一、森鷗外記念館(津和野町)、森本美鈴、山口公和、山崎純治、行橋市増田美術館、夢野久作と杉山三代研究会、柳生じゅん子

2022年10月1日発行

北九州市立文学館

〒803-0813

北九州市小倉北区城内4-1

TEL 093-571-1505

<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

■開館時間

9:30～18:00 (入館は17:30まで)

■休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)

年末年始